輝け！「地元に眠っている宝」

「鳴り石の浜プロジェクト」の事例

大小さまざまな丸石が積み重なった海岸、「カラコロ♪ カラコロ♪」と不思議な音色も聞こえてくる―。

琴浦町赤碕の「鳴り石の浜」は、護岸工事がされていない昔ながらのゴロタ石の海岸で、東西約500㍍にわたる。波の満ち引きに合わせて石が転がり、心地良い音を響かせる全国的にも珍しい海岸。その海岸を核に、観光客誘致や地域活性化に取り組んでいるのが「鳴り石の浜プロジェクト」（馬野慎一郎リーダー）だ。

プロジェクトの立ち上げは2011年6月。山陰道東伯中山道路の開通に伴い、主要道路だった国道9号の交通量は激減。便利になった反面、「素通りされるだけの町になってしまう」という懸念が広がった。

「魅力的な場所があれば人は高速道路から降りてきてくれるはず」と考え、地元で眠っていたスポットに焦点を当て、イベントやPRグッズの開発など多彩なアイデアで多くの人を引きつけている。

実は、この浜は地元でも知る人ぞ知る場所だった。「何だ、この海岸は！きっと観光地になる」。初めて目にした際、上田啓悟サブリーダーは驚きを隠せなかった。「年配の方にとっては当たり前の風景だったかもしれないが、私も地元に住んでいながら知らなかった。活動を通じて、浜について深く知っていった」と馬野リーダーも振り返る。

たくさんの人に訪れてもらうにはまずは環境整備。活動の第1弾として草刈りや海岸清掃に取り組んだ。また、何度も足を運んでもらえる観光地になるには、さらなる整備の充実が必要となった。そこで、浜へのアク

広く参加を呼び掛け、定期的に清掃活動に励んでいるメンバーら

階段やコンクリート舗装を施し、歩きやすくなった浜へのアクセス歩道

ゆっくり浜が眺められる鳴り石テラス

鳴り石の浜

琴浦町は鳥取県のほぼ中央にあり、鳴り石の浜は町西側の海岸に位置。丸石が波にもまれて「カラコロ」と音をたてる珍しい浜で、季節によってさまざまな表情を見せる。近くの国道9号沿いには、地元をはじめ県外からも寄付を受け、石を高く積み上げて建設した高さ3mの「鳴り石の塔」があり、浜入り口の目印にもなっている。

鳴り石の浜はどうやってできた！？

浜の形成の謎を解き明かすため2012年11月、鳥取大学の赤木三郎名誉教授を講師に招いて「琴の浦アカデミア」を開き、浜の成り立ちなどを解説した。浜の石は古期大山の噴火によってもたらされた安山岩で、川によって長い年月をかけて海まで運ばれ、それらの石が日本海の荒波にもまれて丸く磨き上げられた。浜の石はきめが細かく硬く、きれいな石ばかり。きれいな音を響かせ、全国的にも貴重な海岸。

地元住民らも多数参加した鳴り石祭り

や町内の他団体との連携も進んでいる。「鳴り石祭り」もその一つで、7〝な〟り14〝いし〟にかけて7月14日（土日ではない場合、開催日は前後する）に開いている。地元集落との共同開催で、さらに琴浦グルメストリートによる屋台や地元アマチュアバンドのライブ、子どもたちのダンスパフォーマンスなどもあり、地域活性化の役割を果たしている。また、琴浦町を拠点に結婚式を挙げることで地元に経済効果をもたらすことを目的としている「琴浦ウエディングプロジェクト」と連携し、鳴り石テラスでの結婚式も実現させた。

訪れる人の滞在時間が増えると、景色を眺めながら食事を楽しみたいという声も聞こえてきた。そこで地元の主婦が中心となって「鳴り石カフェ」にヘルシーランチレストランをオープン。地元食材にこだわったランチで人気を集めている。

「活動の根底には遠方から琴浦町に来てもらいたいという気持ちがある」と話す馬野リーダー。まずは琴浦町に来てもらい、そして自然が作り出す美しい光景を目にしてほしいという願いがある。その上で滞在時間を増やし、町内でグルメも食し、笑顔で帰ってもらいたいと考えている。

2013年秋、赤碕小学校の学習発表会で児童たちが「鳴り石の浜」を題材にした演劇を披露した。長年にわたって浜の風景と音色を守り続けた同町赤碕在住の岩田弘さんをはじめ、プロジェクトの立ち上げ秘話など、演劇を通じて浜の大切さを伝えた。自分の町に愛着と誇りを持つこと、そしてメンバーの熱意。たくさんの人の活動の軌跡が、地域を担う子どもたちにも受け継がれている。

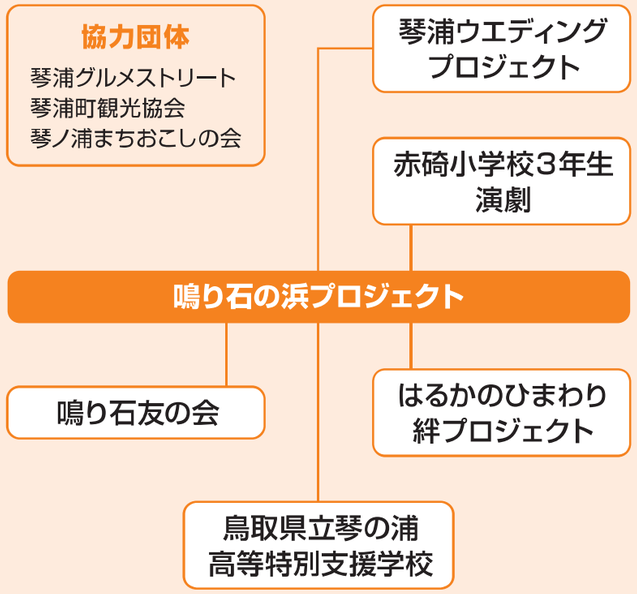
鳴り石の浜周辺には「花見潟墓地」「菊港」と石が特徴の観光地がある。それらを結ぶことで周辺地域一体での魅力的な観光歩道の整備をはじめ、波の高い日や足の不自由な人でもゆっくり眺められる場所として展望台（鳴り石テラス）も整備。自然や景観に配慮し、テラスの石張りはメンバーで手作りした。完成後はベンチに座ってゆったり過ごす人も増え、滞在時間の増加にもつながっている。

■広がる地域での連携

鳴り石の浜を核に、地域住民

鳴り石テラスで行われた結婚式

活動の連携図



〝よくなる〟グッズ販売

[左]CD「鳴り石の浜　渚のしらべ」500円
鳴り石の浜の優しい波音が約30分間収録されていて〝癒やし効果。抜群
[中央]よくなる御守り 500円
手作りの巾着袋に鳴り石を入れ、神崎神社でおはらいしてもらった御守り。手に持って振ると心地良い音が聞こえる
[右]よくなる石（大）1,000円（中）300円（ミニ）200円
恋愛成就、家内安全、商売繁盛などをテーマにデザインされたパワーストーン

鳴り石友の会

2013年4月、主婦の方々が地域活性化のために立ち上がり、鳴り石の浜入り口近くの「鳴り石カフェ」にヘルシーランチレストランをオープン。毎週金曜日と土曜日お昼のみの営業で、地元食材にこだわった手作りランチを500円というリーズナブルな価格で提供している。20食限定。日本海を眺めながら味わうランチは格別！

光地形成を実現させている。第1弾として2013年3月、行政から補助を受けて整備した全長100㍍の遊歩道完成を記念し、浜から花見潟墓地、菊港、八橋の町並みを往復するウオーキング大会「琴の浦ぶらり食べ歩き」を開催。同じ年の8月には、いさり火を見ながら竹キャンドルに照らされた海岸から灯篭が灯った花見潟墓地まで歩くツアーを行い、新たな魅力発信につながった。

■たくさんの人が訪れる場に

2013年夏、浜近くの斜面はヒマワリが咲き誇り、大勢の観光客でにぎわった。

海岸近くの荒れ地を花畑にしようと考えていた中、上田サブリーダーが阪神大震災で亡くなった神戸市の加藤はるかさん（当時11歳）の自宅跡に咲いたヒマワリの種を全国各地で育て、災害があったことを伝える「はるかのひまわり絆プロジェクト」を知り、プロジェクトとして活動に参加。岩手県陸前高田市の仮設住宅で栽培されたヒマワリの種2千粒が送られ、メンバーらが自宅などで大切に育てた。

成長した苗は県立琴の浦高等特別支援学校の生徒と一緒に植え付け、8月中旬には満開に。黄色い大輪と空と海の青色がマッチし、美しい光景は注目を集めた。上田サブリーダーは「多くの人に見てもらい、被災地へのつながりや絆を考える機会になった」と活動の意義を話す。プロジェクトは毎年ヒマワリを栽培し、鳴り石の浜を拠点に活動を広めていくという。

訪れる人を飽きさせず、何度も足を運んでもらう仕掛けづくりは重要で、メンバーもさまざまなアイデアを実践している。2013年12月には海に漂着した流木やパイプ、浮きなど海の漂着物を活用し、昼は〝ごみアート〟、夜はLEDの電球によってイルミネーションを展開。年明けの1月4日（1〝い〟4〝し〟の日）には、琴浦グルメストリートと一緒に企画した食べ比べイベント「紅白〝鍋〟合戦」を開き、斬新なアイデアで話題を集めた。

地域に眠っている宝物を探し出し、それを多くの人と協力して磨き上げていく―。鳴り石の浜は、琴浦町を代表する観光地の一つになり、多くの人が訪れるスポットになりつつある。馬野リーダーは「われわれの取り組みは特別なことではなく、どこでもやろうと思えばできることと」ときっぱりと話す。その上で「地域で盛り上がり、波及することが大切だと思っている。われわれだけで盛り上がるのではなく、町全体が元気になることが非常に大事。さまざまな団体と連携することで新しい視点を取り入れ、鳴り石の浜をより輝く場所にしていきたい」と新たな魅力づくりを実践し、今後も発信していく。

鳴り石の浜の漂着物を使い、鳴り石の塔を飾り付けするメンバー

鳥取県立琴の浦高等特別支援学校の生徒と一緒にヒマワリの苗を植え付けるメンバーら

代表者のコメント

リーダー　馬野慎一郎さん

プロジェクト発足以来、多くの皆さまにご協力をいただき、また近隣から遠方の方まで多くの方々に浜に訪れていただきました。ありがとうございます。活動は参加していただける方々に楽しんでいただけるよう心掛けています。困難もありますが、志がある人が集まれば何とかなるものです。青い海や白い波も、いろんな条件が重なって出来る丸い石も、まわりの自然や生き物も鳴り石の浜すべてが皆さんの宝なのです。これからも、地元琴浦町のシンボルとしてこの美しき浜を保全し、併せてまちの元気につながるよう、息の長い活動を続けていければと思います。

鳴り石の浜プロジェクト

〈概要〉●所在地:東伯郡琴浦町赤碕1972-1赤碕ダイハツ内
●代表者:馬野慎一郎
●会員:約30人
TEL 0858-55-0016　FAX 0858-55-0035
ホームページ https://www.facebook.com/nariishinohama